

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第8号 畜産

発行日 平成23年10月28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/>」

晩秋以降の子牛の飼養管理

子牛は、被毛や皮下脂肪が少ないために、寒さの影響を大きく受けます。子牛の最適気温は13~25℃とされており、生産環境限界温度は5℃です。13℃以下になると、子牛は体温を維持するのに多くのエネルギーを消費するため、発育が低下します。また、晩秋から早春にかけて、免疫力が低下しやすく、下痢や肺炎が出やすいので、防寒対策が必要です。

1 保温対策

体が濡れた状態で風に当たると、気化熱で体温が著しく奪われます。できるだけこまめに敷料を交換し、常に床が乾燥した状態で子牛が休息できるようにしましょう。子牛が休息する場所には多めに敷料を入れると効果的です。また、牛舎内へ隙間風が吹き込まないようにします。カーフジャケットの着用(写真1)やカーボンヒータ(写真2)などの加温器の活用も効果的です。



写真1 カーフジャケットを着用する子牛



写真2 カーボンヒーターの下で暖まる子牛

2 換気

保温のため、牛舎を密閉しすぎて湿度が高くなると、病原体の生存や増殖を助長させたり、アンモニアがこもるようになります。このような環境では採食量が減ったり、呼吸器病、下痢が多発します。天気の良い日中に、子牛の体に風が直接当たらないように、換気窓を開放する、換気扇をとりつけるなどで換気を行います。

3 エネルギーの補給

寒冷時は子牛の維持要求量が特に増加するので、飼料を増給します。出生から3週齢までの子牛は、0℃では適温環境下よりも32%近く維持要求量が増加すると言われていています。液状飼料の量を増加する、脂肪含量の高い代用乳に変えるなどで、エネルギーを補給できます。また、寒冷時に温水を給与することで、十分な飲水によりスターターの摂取量が維持され、発育確保が期待できます。

農作物技術情報の23年度定期発行は今号で終了となります。
気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
※ 発行時点での最新情報に基づき作成しております。
※ 発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日～11月15日は秋の農作業安全月間

農作業 無事故でつなぐ 明るい未来